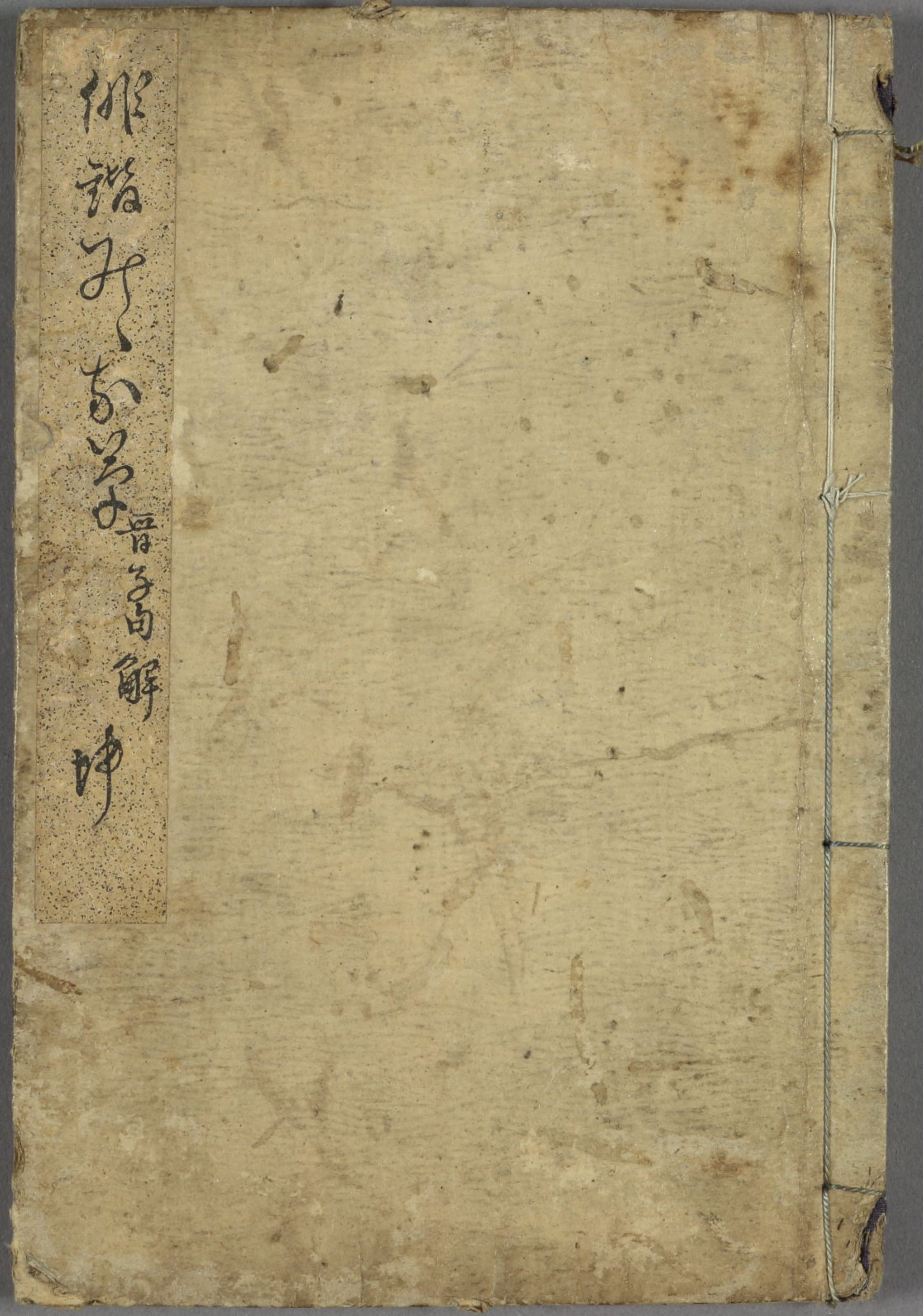


俳諧子  
古  
晋子句解  
坤





俳  
み、草下 晋子句解

表氣肝螺窗翁遺稿

其角堂永機編  
小築庵春湖校

暁

哥まは一字解とて俳諧まはまり語を  
一字の語を句作る可し

をより園をうきしや梅の花

長上の今梅を贈ると暁園のわきより起し梅をて  
折誠意言ぬるゆゆれとさとし下ると為長者  
折枝の意を念めたる也

累句高

和心水推敲之句

かゝる時よさしむみさう梅り門

心水の詩未若多々くそさうさうの詩云愛君滑稽一時  
豪雁字帶霞入彩毫想見梅花門裏月不知  
誰与定推敲さし推敲ハ賈鳴ハ故事ぬり

梅津氏

の祖父大坂表の軍功より

帝感状

御た刀をた戴り所正体

十七の翁とくや佐竹上杉陣に暖等の

家長十七んをい家のゆおつこころ

正月十日後岡の奥りはと其東 衆督

執権とてしむるの四層あり

幡指を文墨服やむあみふ

梅津氏軍功ありし時の旗指の子孫ぬく定て米用  
せられたる今この文墨服をつとむるぬくしと  
取合せしる此意のり偉句トトゆえし格う

笠巾はたみさのえ是しりやの梅

をさし能の間狂言也 観音多々想の既巾を  
冠り六行さのしよさめを言意をこころ

己の物言よるゝし 埒是別ものほや  
かひはなほはなほのけりへんし 埒を  
君ら

橋本を画し

舟にせよのり 継とやうしん

推定 兼盛 家室の梅のこも枝やこもつん

思ひのめく君ら 舟にせよのり 埒を

橋本を言けりし也

万葉志ふまゝ 朱雀の柳とけり

所々のりし也

きりくく西の虎もり 埒らり

万葉志 朱雀の柳とけりし也 朱雀今の高

埒らりの名なれハ万葉の時作の埒らりし也

なし 催馬屋の埒らりし也 朱雀今の高

その埒らりし也 朱雀今の高

とやうな埒らりし也 朱雀今の高

せんざい 埒らりし也 朱雀今の高

と何れもせんざい 埒らりし也 朱雀今の高

け 埒文例の活氣もさうせ 埒らりし也

照印半面美人の字ヲ琴形の甲ニ備  
えをばしを冠里云の万句の片巻  
押込み侍をこし

まの月夜よりの書はしのみ

冠里云万句の裏ををゆに押けらるるは事点の  
カクシぬきしをり上目入片札上の文鎮を  
くささるるをぬきすを角とし  
と草廣はよ

要別つらう  
そ所あいら

周の夜のをらあいらと入柳の袖

ちうねいり不居すうを新篇の原しさを  
秋宿りしてぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
國語とし

柳干ヤ柳の曲をつらふ 狙

鞠の糸を積大回界と云 猿田彦し鞠衣紋海  
物ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
柳干を鞠をぬきぬきぬきぬきぬきぬき

春雨

細くまきつあつ雪の雨おきな

繩の謡しつら面はしつら。奥のうらまひ

まゝのきのりみでうら け句画漬ぬらぬ

階子くくもふけり及ふ燕ふ

万葉の鳥終末とけりまの鳥

ひるむゆきを鼓うらうら

難波の漁、そのち鼓ハ海舟も六ふらとてきく  
あうとれあう 何の世の世ありこころ

仁和寺

いおつるの世りはゆら 桜水

金剛經 曰如夢の泡影如露亦如電 仁和寺

懐古十分也一向の向すく且經

川柳をばはふおあし、らひな婦

所用よふて児くすお死の鳥

白詩 臺頭有酒鶯呼客

雜司谷

山里ハ人をけむの世見ふ

陰書く松のまゆへははらやめしはなみ  
やうもゆぬ山里の松の葉まのまへぬらうき  
月清集のまゆ白く記臆の誤り

花の種をこのまゆへ 喧嘩買

雲林院の講まことのゆへぬらう花をちんちん  
号の羽ゆへはらう松のしんちん入るまゆへ  
木のまゆへはらう松のしんちん入るまゆへ  
いとも人のまゆへ花根藉のくまゆへ

心ちをいゆねはらうまゆへ 岩つ

西川の画の讀し 心ちをいゆねはらう  
ゆねはらう西川のまゆへはらう 佛殿の生飯し

子記 一二の種りおゆへ

寛政の次の版中く中筋二目三目の読み  
寒松の種りおゆへ茶活しとせし二つり  
三の種りおゆへ松の種りおゆへ  
一二八四と十五の種りおゆへ  
歌梅子の百種の種りおゆへ

数々十五の飛鳥をて十廿の初回とりりあまの  
一白立くさし ちさういづかへ帰しけらん  
何なる道の宿へ入るまゝあまきこく 中野燈籠の  
吟とやのびす方程何處し

東海言 雍州府志に云 所東橋のつお大和古道に小橋を立初りて  
何れを一の橋 次を二の橋と仰し是十の橋の吟 一二の橋の  
相向うまじし由意問に發り答え回カサリ

林中不賣新

せうあくし山何なる町とては

山何なる町とては 山何なる町とては 山何なる町とては

西行

席令初て上京の鏡

涼しくと都のそと口連と金

揚別霍とのそとまゝ 腰纏十萬貫騎鶴上揚別の  
煮ぬり

夕立やうらみあつて心暮ら

涼しくと都のそとまゝ 腰纏十萬貫騎鶴上揚別の  
煮ぬり 古今物石

西行と御花坊より清心所

西行ハ乃の道の清水御花坊ハ龜つ板子と魚の若  
ゆきの時清水を降るまゝの義經記に云えり



こぼり

此碑は八江を哀まの堂下

元禄五年一こぼりこぼり糸生禁門の碑を迷らる

唐哀江頭碑あり叔子墮渡の碑ト云

遊子残月

耶南の月おあめし凍る

住りしをを切するまき山里の何せり

くまぬまきお半のわらわ 後成

あ仙貫之の古昼

冠る指をさあめりあ可汗

もく 實定とらへ殿まで冠を為せり時

りあより八紀の母身之てあるまき山里の何せり 此の實定り

野青せ八殿上座せりしり 後成り 尉りあめり

と飛んけの向をて殿まで進して生の松りの

うををん

木曾初や涼れし味を志ら

新左今 琵琶の店大自王后

すししは八生の和り増しともそめる扇の

ゆわりのゆわし 韻塞ある扇の飛を量し許六の蛇ん

いつ

雲丹たぐひの雲

筆打力ふ揚しすも也

雲丹たぐひ

雲の雲の月も月の雲よいつこも。雲丹たぐひ  
うけの時の雲もこころ

筆打力ふ揚しすも也のうらまへし落光いそよこ  
雲一白化ハ影みすたものなる

維摩の居し

山のそハ尺衆しりり 座の白

三千の尺衆を僅方丈の室に入ハ維摩の法術なる  
山影入門維押不出 山の影を尺衆しりり  
座を方丈しりり

母で月をけるか

何れもハ雨元改り十三夜

何れもハ雨元改り十三夜  
何れもハ雨元改り十三夜  
文行のそよしなごころのまくらあむし  
月もそよの浪もそよ

宗因を月をけるかの白をそよし

辛八くハ江戸都の二百貫

辛八くハ江戸都の二百貫  
辛八くハ江戸都の二百貫 宗因

二星宿む隣一のむあ年十五

白氏文集 隣家壤眼歳



何のう、彼等が升りぬるもの、  
何の昔は、何のけ、何の音さ、  
何の瑞は、何のた、何の

饒青流雅故

芦刈のうを喰ひてまぬ

大和物語

若形くしあ、  
浦八さき、

西

何のう、  
浦八さき、

びものり、  
富、  
御碇、

隣家、

大絃ハ、  
為、

琵琶行、  
之、  
昔、

太、

う、

峯、

嶮坦し

松のともその火さけけ 存醬油

け白雜ナラト  
いたまや

まは集まけけのひく 野よて

河一井の山下水々ぬま けけの火  
さけけ衣けけなん

大山

嶮押やゑる 若根乃ちあみち

智馬といふ人の文け

十八所の岩壁を九丈まこけけをけけ  
しとせ 靉行小使さむまをいれまけ 孝助の

名をたしし けけの音をけけし 所ト

いせおのせの音のけけ

えおのあ貫奇さのけけ 嶮押の  
まのまけし けけ

あけおのハ けけの酒のけけ

林間 暖酒焼紅葉 白詩の意を和し

やあけのハ 五九集書名のけけとけけ

けけのけけのけけ

平泉おの けけ院のけけ

けけし 切字定まけけとけけの余音けけ

白扇倒懸東海天といふ句つひけいしん  
和してまよはるるにやうせしるこの  
ありしを立忘るゝて山の半版と  
つらきものをを要するといふん  
ほりなりとて 白扇倒ハ石川公の傳なり

白雲の西より来る普賢富士

江口の宿に普賢をまつて何れも舟ハ白雲を飛  
まるとかきり白妙の白雲よちあつて雲空  
りなふ 古文浮集  
あつて一向の上社季々々々

秋風起る白雲飛

吉田氏

唐柜の糸をよれしるま向か

白の掃きこのまよる谷をよれしるの西隅く糸を  
糸をよれしるま向か  
又花を掃きよれしるの香をよれしるま向か  
糸をよれしるま向か 唐柜の糸をよれしるま向か  
やうなるものなり 中七み字の糸

守山の糸をよれしるま向か

大津地をよれしるま向か 守山の糸をよれしるま向か  
糸をよれしるま向か

生治新五郎ノ上京リ

神の木の扇笑ふ子うろろ死

け句自問自答の地とりあふりー 狂言形とハとして  
為せし扇をつらふるハあはれなるハしき  
湯をむし何ハ笑あふるのてハおととなく

とこあゝの一車ーとのお炭

賣炭翁 苦宮市の意をこ表し

滝口や地のはたけの池の 知る 滝只一人をこ

栲角といふ女仙を採りて 平家身のかうはゆ

燐屋

窓鏡のしやし世をゆり雪は心

元和の改まるらん窓はらん自二百文の  
課税をあらまじりーるの何れは是は窓鏡ハ心

のりあゝ中は眠沈て

と平志 刘伯倫ハあふり死

劉伶字伯倫 作酒徳頌

煤掃くく夜ハ女房めりーや

了家集 銀竹のりやーあふり死  
ゆの毒ーととあふりーま

尺津彈

千觀のるいせのしーのる

千觀の僧し元亨秋書之奇

大津の訳は馬をたしし世を安しん人も

隠逸はものせしなり

右五十五章ハ螺窓翁遺草の粗釋也

百韻

嵐軒屋

替わるとまをまてかゝる細けりぬ

光うらむまをぬ霜のころけ

塗靴平し晴着袴り袷衣たし

花酒ぬれぬ顔の何ごと

お宿る水菜をけり一ツまき

日和の座りぬまの大陸

まゆ子の葉をたぬまの立寄ぬ

はなぬまのしとけりた入る

水鏡

弓雲

指印

正義

古外

菟好

手福



虫の足は

啓蘭をほりしむけ人のるをゆく  
 ちとくおとせとてまきこ窓残  
 ぬきこおとせとてぬきこ窓  
 くの暑れよといふるまらこ  
 土用所しむる殺さるるをゆく  
 歳より命とて女房新し  
 姉さるのちのちのちて有馬筆  
 峯の何しよとてゆく  
 音聞の却し日故まのまをゆく  
 おりけのまをゆく

梅翁  
 笛秋  
 坐仙  
 歩月  
 三升  
 梅章  
 菖蒲  
 校玉  
 三瀬  
 於一

扱ふふと踊りまなよりゆき  
 舞ふこ系すぬのひりりゆ  
 とおのこも花より曇るまのま  
 雛子啼くまは清る尚者  
 のい曲る墨もまは清る尚者  
 今所てこの花用しむる  
 清らぬのまは清る尚者  
 眼くまをまは清る尚者  
 わくまの羽打まは清る尚者  
 都まをまは清る尚者

梅翁  
 玉仙  
 静和  
 柏秋  
 正雄  
 麦步  
 雪居  
 泉雨  
 華名  
 まは

累の國貴之高

道つきの潜上りりり形さささ  
 尻亀汁のひるりりりり  
 おものごりり裏の茂宿  
 くの香車りり附本りりり  
 寂糸の何の魚板りりりりり  
 ちりりりりりりりりりり  
 月の宵々宮の二階を流ゆりり  
 けりりりり足袋の対切  
 隙ぬえ作たるりりりりり  
 菊石りりりりりりりりり

孝高 招弓 光榮 明齋 物繁 永國 市川 不及 素直 文都

月をりりりりりりりりり  
 こりりりりりりりりりり  
 菊のりりりりりりりりり  
 薬きりりりりりりりりり  
 けりりりりりりりりりり  
 ちりりりりりりりりりり  
 すりりりりりりりりりり  
 めりりりりりりりりりり  
 石垣りりりりりりりりり  
 ちりりりりりりりりりり

樹春 永二 貴季 於月 春江 雪雨 醉南 桔伝 招氏 吳仙

虫  
山  
志  
和

日たる百人の海の膳部立  
 のみよひしりゝ煮るか露  
 もらひ給。江の舟解致  
 鱈おろくろふあはしあもの  
 羽をまを流布子よ思。望を  
 ころくし心を隠す心  
 時よふ油室のまろく我をまき  
 醜はありのたんれし  
 夕おしにたの念佛ふかぬる  
 新おろくろくとりかろく

春海  
 採るの  
 煮石  
 空狂  
 源輝  
 照子  
 精舎  
 耐徳  
 大器  
 古筆

ちかし輝ふとけ、時よふ  
 りをいしし海すのう橋  
 ちろくし居かし教のまろく  
 ちかししししし花の起す  
 節よふし月のあまのうらむ  
 ちかししししし恋のこころに  
 ちかしははははは我體  
 ちかししししししははははは  
 流の春のほまははははははは  
 ちかしの翁をこころふははははは

有我  
 了ら籠  
 宇山  
 何山  
 尋香  
 成雅  
 常笠  
 素水  
 田好  
 美倪

思  
山  
志  
和

夏子の遊立るゝ 表甲  
 峯のさくさく 狭き門口  
 阿の宿まのまも下戸の仲買入  
 夢しゝ川こし謡 一者  
 風おびく日之涼く飽のそ  
 といしちを我ちの名物  
 茶もしゝの茶こぬぬて  
 ぬぬちお置りきき志まき  
 遠祖也中の痛の巻とそ風  
 縁らららと日並 孫ふ

菟石  
 花全  
 匠月  
 流翠  
 園所  
 蓬兵  
 碧石  
 梅年  
 蓮州

多知をまき一切経會まゝ縁す  
 徳よ子とものよぬぬ縁て  
 雲をの目方ぬぬの柿青打  
 つゝとての遠い歌の権をな  
 白雪のつらな限りて縁つゝ  
 豆敷あつとと益ちのせり  
 弟者よ八弦海さるる 吉柄織  
 ぬぬぬとて縁の縁の縁  
 後を置けりぬぬぬぬぬぬぬ  
 招葉おぬぬぬぬぬぬぬ

本家  
 巨石  
 外傳  
 龍吟  
 於暇  
 在焉  
 遠江  
 晉江  
 林華  
 梅友

虫の音 遠き

何れもさうなまゝにむすねの雲に  
海原をよめさる柏子よの音  
突合うのつらきな月の友  
菌の芝よあり降り 旬  
信心の結行とくは秋葉山  
村の結致の音あゝ人  
つらげの肉を乞入る様とて  
つらとて護謄のうらとて皆  
清合よきその天気の思より  
とさすもの色をまつ海

其峰 栞石 小裁 亀池 芦水 孝外 函外 藤歩 稻所 架壇

前世界への下を花咲て  
水とてのけ致さるふ 夢の日

酒意を雨

百首のなまむすね八

何れもさるものなまむすね  
あゝののむすね 植のきよき家  
山とてさるな 岸の海  
けとけとて 神のあまを  
八音谷とて 岩の 野のわら

其峰 一景 泉境 羊山 静所

櫻山園集

七

神祇

神のや大神堂へ一法を  
くく馬屋まつを纏ふきり

其角  
嵐所

高阜の氷社

祭見。くわけ入道八幡くら

祖原

ま結り五十串をさるる神

菅笠

をとり子のむきかへりもり

数多

ひんがし祭りのあつたはら

松島

お神楽のゆきののり

雪原

幾と世のねりの結りてお産帯

春江

はらり九條うま入りの髻ころ

披山

おのりねりておまもり大根括

原野

こころをすまひつ旅あつたま

徐東

祭りの里をいそいで新海へ

採花女

おまやうり新の解を解ころ

幸酒

三遠

福わりのおまの道

お櫛

釋教

佛とらちりくの甚く日おふ  
其角  
法を視ハ多うしんが佛生會  
嵐行

嵐行居士三十三回各前文略

かまのよる二中板四はさ月  
春湖

名をまけハるのみ念一我の心  
芥舎

那つーまきるのこまのー木の葉  
蓬子

れらとつ流るは深な寺たの色  
浪水

るーこの世のきまの力おん  
浮美

咲しれちる三十花や木のこま  
那水

那きつれ心道平名あこるふれあや  
波色

妙法のはやあはるこころ供わら  
南歌

ー新の昔をさるふ又のり  
藍屋

みのくろのあかりのまよ一ま向  
十洲

あつちまのわらう薄き見し思ひ  
恋皮

新床のし何とらのゆもよめ  
牛苗

ここのまのりこあこま向まのふ  
敏樹

古井及こ流るるの日の曠  
極紫

草の茂るをあふ飛ー木の葉  
大音

月新のこまのめろり四軒の招  
素石

中膳の形を伺ふつらう草うぬ  
 雪の茶言とていふゆき通  
 神草の心とて立の品とてい  
 何れとておはすはなす  
 夜の戸の草一はら子意象  
 そは心世の節とていふゆき通

心福

みの山一や三十年の夢のれ  
 けき海一とていふゆき通

在友  
 風雪  
 乙歌  
 二山  
 小舟  
 素直  
 氷檜  
 梅年

画

小世城わけてなめんとていふゆき通  
 ち作 下はなるといふゆき通

ちのちのちのちのちのち

色をたなま男中の包のし小袖  
 着のうとしてお目まの涼とてい  
 ぬえの娘のとていふゆき通  
 のはる見を隠すとていふゆき通  
 三つを居るとていふゆき通  
 送るく物とていふゆき通

其角  
 嵐所  
 草志  
 小裁  
 静和  
 素水  
 吳仙  
 落英



ん 結六門のあまある 嘉平の春  
 新し〜牡丹の 向ふ 寺の春  
 結集の心白と 神を 舞あや  
 夜を〜とむす め 解〜 ころり  
 ひ〜と寝つ 遠き 砧を 眠る  
 春の 花 誰れ 守り の 上 草 履  
 杯色ハ 寺 ぬ〜 春 湖

初雪のまじり雪のつらさのあま〜祖志の口實なり  
 へ〜たげ白のを〜のつらさ〜六のま〜〜との  
 め〜〜〜のつらさを〜ひ〜

白ふを〜 春草の 花の 春あふれ 永柳

無常

辞也

くら〜と〜 花の 秋の 暮 嵐野  
 化野の 境も〜 の 骨と 鳴 其角  
 春の こと あり なるに  
 水月 花の ち〜 也 茶碗 ちゆ 華谷  
 神隱 山〜 け〜 阿〜 海 蓮子  

 三時の 聖道 送〜
   
 多〜 心 あり ぬ〜 花の 老 花 春雨  
 芥子 あり ぬ〜 花の 世の 送〜 畠水

時多 水の湯 — 河の羅魂 後 海舟

父の遺骸及葬の場々々々々  
起るのりねむいをなま

村々々々々々々々々々々々々

血御

名所 地名

三尺の所を西向なり — 公の所 其角

ひらひらひらひらひらひらひら 氣肝

墨水

花を錦 — 人の織りゆく也 濁黄高

くぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ひは足を君の懐に — 木の梅 成島 梅水

洗を流す竹の色や 京の町 素石

おもしろくも 京の町 貴子

墨水 大狂

花のくし雨の降り	也すきし川	竹良
を盛るくしつらぬり	壬生碑	永二
招きよりつらぬり	きけ	芳海
何ぞ来きぬ	ぬ	甫山
招きよぬ	く	對儿
さしぬ	只	初子
大原	山	榎春
何一亦を	は	梧川
な	の	永瑛
何	の	陰川

三あつら	花の文	晴	蛙	舞島
幾よ	か	く	宮	江
ふ	の	あ	り	村
新	比	山	福	芸
多	遊	り	毎	字
和	美	の	日	竹
朝	日	山	さ	山
花	の	心	を	雄
花	の	心	を	雄
花	の	心	を	雄
花	の	心	を	雄
花	の	心	を	雄

二三宿たよまきあう子田川  
浅州しやましくるぬれ杜の蔭  
まのまじき正面ぬり善光寺  
ち谷の田言ちしつさるふ  
きく火滝をぬりし那智の女

高野

とま〜と我宿世のたのみの院

但康  
まの蔭  
雪降  
お教  
をの

体懐

子成り入成つぬるふと〜の道  
花咲ぬあをぬり母己柳〜ぬ  
喜〜あを〜し

子を抱〜ぬ〜の〜習ふあ〜  
内〜〜〜せ〜遊〜道〜し〜ゆ〜と〜音  
先〜我〜成〜し〜涼〜〜と〜級〜者〜  
あ〜つ〜杜〜の〜木〜あ〜し〜つ〜人〜の上  
あ〜〜〜あ〜〜ゆ〜る〜る〜月〜々〜我〜ほ〜子〜る  
ま〜ま〜あ〜ら〜う〜成〜う〜し〜る〜海〜の〜し〜の〜ん

其角  
高野  
壽久  
竺仙  
梅幸  
涼輝  
和親  
東京  
暖色

虫宮遺集

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 我 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 子 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 艸 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 氣 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 子 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 繪 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 魚 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 夕 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

三 概

お 洗

桂 苑

午 歩

金 羅

吉 宜

香 瓦

梅 惠

水 檜

詠 仲

松の上より馬をこらえ来る。むしもこら  
 けし皆の血をみる。花のさし  
 道つきの足の跡さよふみのつとこ  
 花狩一帯り逢りゆく 花根我  
 花雪を裾圓の瞻のりふまの山  
 秋の山をさすゆくはらつと 岡子る  
 孫の海をつと宮のたつあむに  
 笑ふはらつとからむあきる 岡子る

其 角

嵐 野

酒 竟 高

祇 子

省 我

耳 孫 清

樂 二

福 所

黒宮遺集

六八

主

夕陽の影を宿るの好む  
薄かな旅訓のつらさ  
旅のつらさ  
妻のつらさ  
を面おもふたる由る谷のつらさ

日向のあまき

山あがりけし九十九折

片丸くつと筑はるの多めゆめ

鮮魚

舞園

金の

雪雨

草花

酔雨

浪花

白濁

梅年

祝

祝寿育

たぐ風の皮く膝の緒つとく

西城の初幌のおく  
奉りてこころしく  
五回ふふもの  
そく家室つら  
名とく

子のまこおと根

竹有佳色

竹障の白のほの竹の艶

竹箸の青のさの河

其角

嵐軒

檜春

猿垂

黒

丸

虎々々東て控さめささ小松 古久ぶささめしれ一解の音 寒菊ゆとり金さく小唐血 子を連く雀小真句遊ら 少障よと一の婆りさ飛さ 新逢やちまき基のけり ちのや新の子解さとり金 ちいさくささの葉し柏 田心四尾鱗さまのの包 希ふけり雀の頭さ橋さ 	ちの 菟好 白鷗 二葉 本流 指並 巨石 精知 弓雲 松家 
---	--

いささのゆらゆら小盃 山ささゆら控さめさ小 ささ水さささめさ川の流さ 腰さ解めささ一尾さの尾 新逢 神々の声何れさ代の門り松 	極号 壯山 煮茶 卜早 油羹 
---	--------------------------------

天下美事ささささ  
 万民凱歌さささ

蝶の舞ささささささ  
 和 水柳

卯時混濁

その泣き点滴のりく深く花  
羽のゆく酒のちかやみあくら  
魚行や甲を一二枚夏の心後

松翁  
化堂  
静湖

ゆらぎと動のきりあはら  
葉の戸をぬくも早し初燕  
新秋やまのいそがしきさう  
折とあかきまのさるる河のなみ  
枝うらやまのし水鳴ふ柳うり

樞斎  
金蘭  
連水  
梅窓  
乙亥

山麓の陽のさか  
新市へのゆくまのこまの  
月代の四一はさるる柳のほし  
赤いそよ花野のさるる  
赤いそよ花野のさるる  
山をぬく車のはらふ  
涼いそよ花野のさるる  
花ついで人のさるる  
新秋やまのいそがしき  
よの草のさるる

梅り家  
如竹  
不角  
梁九  
厚富  
為古  
曙之  
芳泉  
茂精  
素古



声しきりしうらなむれし時  
 碧を揺りし松の下なる露  
 宿りたる雀よよ尺牒の紙  
 去りての光なきまじらぬ  
 折曲るるうらみ垣のうら  
 芳と折るるまよひの吟ふ移る  
 ねくまのやわやわの山  
 城のそのうらみの放下僧  
 雲霞の壁の雨の遊そ如  
 宿著しつらむらりつら所

石首  
 芦葉  
 梅旭  
 旭扇  
 其跡  
 呂長  
 空鳳  
 雲霞  
 月夜

往来し居しあて古きにはり  
 松林の絶く妙峰の四日  
 色とりぬぬのし色けり子  
 罽舟ののて来りし雪の雪  
 陽のしんをゆらそ子梅  
 赤のしんをゆらそ子梅  
 甲の中よあけりし下  
 春分の川田のしり夏の日  
 舞毎るるるを揺りし浪向  
 と所しるるるを揺りし浪向

あそ  
 雪重  
 文海  
 三柳  
 小窓  
 菘松  
 山疑如  
 梅水  
 素物  
 為流

某の道より降りて	廣野より遊ぶる	琴瑟
ぬきまじりて	八杉並に	の鳥
名目のあはれ	とら	仙馬
こころの寂	はる	多良
花と草のあはれ	を	袖丸
降る	雨の中	田植唄
雪	の	海
減る	人	松
泣く	花	海
片持	竹	景

初秋のころ	秋の	井
空を	雲	五
江の上	霜	素
普	江	袋
瑞	雪	百
あ	山	一
少	山	一
と	山	一
た	山	一

移るぬ家やなると自然山  
池山  
如くはらりてあなまをさすい  
文流  
疎らたのこまも雨りよの  
招鳩

まのの世のついで

石の光り白く如くはるの光  
魯文  
石の光り白く如くはるの光  
草泉  
達へ急やあまもたすん  
梅丸  
草の葉の白く如くはるの光  
鈴子  
水音り気のはれり  
羊仙  
是のまを起しはとの巻の  
汲古

馬士はけはるる成りし  
厂峰  
名月の内はるる推り  
世雲  
雨は出りし杉原のり  
水  
葉のまはるる  
龜石  
三月の内はるる  
名揚  
水はるる  
招鳥

訪具

立あてしよの春作の  
素水  
薄の極力ぬく  
甲庵  
よの春あてしよの春作の

以傳一四	留まらぬ	ひさびさ	下	所
柳より	新	く	く	神橋
ねん	縁	あり	満	る
牛	鞆	の	行	く
八	知	ん	民	我
望	み	ぬ	る	我
古	庭			

雅

降と下りぬるもおぼく留まの雪 水橋

俳  
み  
な  
草  
尾

芳の派七世乃主永操の事  
 先考標之圖乃主の法流の事  
 なりて為退福居士の遺稿の事  
 中なる系世の事志なきは  
 上ありて美くたるものあり  
 つくさるゝお信の事  
 幸ひこの稿よありての事

同一法あるは因てあるは...  
去りては先きを採りて...  
明治辛巳秋八月於麻布  
孫芸圃著関

治年八子分派



本居翁著

鷗書古今和歌集遠鏡

水戸景山公選

和信司集

其有也著

俳諧八十六歌仙

込刻

明治十四年十月九日法皇同年年同月出版

編輯人

晋 永 機

南葛飾区小梅村六十四番地

出版人

拓奇半造

浅草区酒蔵町十九番地

